

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!  
 ☆幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!  
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

## 史料ネット News Letter

第42号 2005年9月7日(水)

発行：歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)



▲野田家での調査風景(2004年11月16日撮影)



歴史資料ネットワーク編『平家と福原京の時代』(岩田書院、2005年5月刊) ▲

### ■□■目 次■□■

#### 卷頭言 「史実」と「伝承」との間

藤田 明良・・・・・・ 2

#### ◆◇特集◆◇ 阪神・淡路大震災時の救出史料が寄贈に

～神戸市・野田家史料の保全活動と寄贈先幹旋活動について～

加納忠男氏及び野田家資料の寄贈を受けて  
史料ネット活動について

松下 正和・・・・・・ 3

清水 太郎・・・・・・ 4

野田 濠子・・・・・・ 7

#### 2005年度歴史資料ネットワーク市民講座

「源平合戦～伝承された戦いの虚実」のご案内・・・・・・ 8

## 巻頭言

### 「史実」と「伝承」との間

藤田 明良

歴史資料ネットワークの市民講座は、しばしば兵庫津をテーマにとりあげている。ここが歴史的に著名な場所というだけでなく、地元で歴史をいかした街づくりの気運が盛り上がり、住民や行政と連携した講座運営が可能になっていることも大きな要因である。お寺の本堂で催された一昨年の講座の時であった。「先生がたの研究成果とは違いますが、地元の伝統文化として続けていくことになりました」。共催していた地元文化団体の会長さんから、やや改まってこう告げられた。一瞬何のことかわからなかったが、少し後になって事情が飲み込めた。

兵庫区には「清盛塚」と呼ばれる鎌倉後期の大きな石塔が残っていて、地元では平清盛の墓として毎年、墓前で供養祭を続けてきた。近年は町おこしのため一層力が入っている。しかし、研究者の間ではこの石塔は西大寺の叡尊が律宗の布教事業として造立したもので、清盛とは直接関係無いとする説が有力だ。1999年に出版した『歴史のなかの神戸と平家』をはじめ新聞や講演などで、私もその説を繰り返しのべてきた。実は史料ネットとの付き合いが始まってから、この清盛の墓ではないという研究者の説をめぐって、地元では対応に苦慮していたらしい。数年にわたる議論の結果、歴史研究の成果は尊重するが、「清盛さんのお墓」という先祖伝来の言い伝えも地元の文化として守っていかうというスタンスにやっと落ち着いた。そのことを会長さんは伝えてくれたのである。自分の発言が地元の皆さんを悩ませていたことを知らずにいた能天気さを恥じるとともに、郷土の「歴史」と研究者の「史実」との見事な折り合いの付け方に感服した。

もちろん、この石塔がいつ頃から「清盛塚」になったかという問題もりっぱな歴史研究の課題であり、『歴史のなかの神戸と平家』のなかにも関連する論考がある。このような伝承が形成されるのは江戸時代からだというのが通説だが、私は最近、中世に遡る可能性もあると考えている。近世の地誌類は、この石塔は清盛廟所である八棟寺境内にあったと述べているが、室町時代に興福寺大乘院門跡が兵庫に来たとき、八棟寺に参詣し清盛像を拝観したと日記に書いているからである。清盛を偲ぶ意識と石塔との結びつきは意外と古いかもしれず、楽しい研究課題である。

さて、平家伝承といえば「源平合戦」に関わるものも有名である。今年の大河ドラマでも見せ場として描かれているが、歴史研究が明らかにしてきた合戦の実像とは大きなギャップがある。そこで今年度の講座企画として兵庫区などと共催して、9月25日

(日)にシンポジウム「源平合戦—伝承された戦いの虚実」を実施することになった。当日は『源平合戦の虚像を剥ぐ—治承・寿永内乱史研究』（講談社選書メチエ）などの著書がある川合康さんの講演とパネルディスカッションによって、中世の戦争の実像や合戦神話の形成過程を明らかにしていきたい（詳細は別掲）。

(藤田明良・天理大学教授・史料ネット副代表)

◆◆特集◆◆ 阪神・淡路大震災時の救出史料が寄贈に

～神戸市・野田家史料の保全活動と寄贈先斡旋活動について

松下 正和

このたび、史料ネットでは阪神・淡路大震災に伴う被災資料救出活動の際にレスキューし、当ネット事務局（神戸大学文学部内）で保管していた史料と、所蔵者である野田滯子さんのお宅より新たに「発見」された史料について、寄贈先を斡旋させていただき、無事寄贈手続きが終了いたしましたので、ここにご報告いたします。また、寄贈先の一つである鳥取県立公文書館の清水太郎さんと、所蔵者の野田滯子さんにもご寄稿いただきました。お礼申し上げます。

（これまでの経緯）

当時の史料ネット事務局の日記によれば、野田さんは神戸市内の某区広報紙に掲載された史料ネットの記事をごらんになり、1996年10月4日に、当事務局へレスキュー依頼をされたそうです。その後、10月14日に史料ネットメンバー3名が野田家を訪問し、史料を保全いたしました（詳細な経緯は、史料ネット編『歴史史料ネットワーク活動報告書』所収の坂江渉氏による報告をご覧ください）。

2004年11月15日、野田さんから「新たな史料ができたので見てほしい」との連絡を事務局にいただき、私たちは翌日訪問し、史料の確認を行いました（坂江渉、木村修二両氏と松下が訪問）。拝見した史料には、滯子さんの父拓郎氏が教員をされていた際に使用していた教材（中国の古銭①）と、滯子さんの叔父加納忠男氏ゆかりの鳥取関連資料（②）がありました。野田さんが寄贈の意志をお持ちだったので、私たち史料ネットでは96年に預かった史料（③）とともに、寄贈先を探すことにしました。

何人かの史料ネット会員と野田さんで相談した結果、①については世界の金貨銀貨を展示している尼崎信用金庫「尼信博物館」に、②については鳥取県立公文書館に依頼することにしました。12月8日、野田さんと松下は、①の史料を携えて尼信博物館（長橋紘一館長が対応）を訪問しました。交渉の結果、尼信博物館さんはコインミュージアムの展示資料として、①の史料を受領してくださることとなりました。唐代の開元通宝から清代の咸豊通宝までの中国古銭41枚と日本の古銭1枚（文久永宝）が寄贈の対象となりました。②と③については、下記に清水太郎さんのご報告を参照してください。

史料ネットは被災資料をレスキューした後、所蔵者の生活が落ち着いた段階で返却することを原則としています。しかし、所蔵者への返却が困難な場合（例えば蔵の解体や新居への引っ越しなどにより、保管スペースがなくなったなどの事情がある場合）や、所蔵者が寄託・寄贈を希望された場合には、所蔵者の意向を尊重し、しかるべき機関を斡旋することとしています。

史料ネット活動は、被災資料をレスキューするだけではなく、今後の保存や利活用のために、所蔵者への返却や、返却が困難な場合の寄贈先斡旋も重要な活動となっています。最終的な保管先を確保することで史料ネットの被災資料保全活動のサイクルは完結します。2004年度の活動として、当初は事務局保管分の被災資料を返却する作業にあてる予定だったのですが、度重なる水害への対応に追われ、思うように進みませんでした。2005年度は、昨年度レスキューした水損史料の処置とともに、阪神・淡路大震災での被災資料の返却活動に力を入れたいと思っています。

最後となりましたが、史料の受け入れを承諾してくださった鳥取県立公文書館と尼信博物館に改めてお礼申し上げます。

（松下正和・神戸大学文学部助手・史料ネット事務局長）

## 加納忠男氏及び野田家資料の寄贈を受けて

鳥取県立公文書館  
専門員 清水 太郎

歴史資料ネットワーク（以下史料ネットと略）の松下正和先生から当館に連絡があったのは、昨年暮れ12月3日午後のことであった。話の内容は、「阪神大震災の直後、自らが参加する史料ネットが神戸市東灘区の野田家資料をレスキューしたが、この度、久しぶりに野田家から連絡があり、新たに資料が出てきたとの事。鳥取にゆかりのある方のように日露戦争に関するもののである。野田家は鳥取のしかるべき機関に寄贈したいと話しているので公文書館に連絡した」との話であった。詳細をデジカメで撮影し、送付するので内容を確認の上、寄贈を受けるか否か判断を仰ぎたいとのことであった。

当館では県内からの資料寄贈の話は時々受けることがあるが、県外から資料寄贈を受ける例は決して多くなく、また、史料ネット等を仲介として個人の方から寄贈の話を行うケースは初めてであった。そして何よりも、鳥取と神戸を結びつける糸を自分の中に見出すことができず、軽いとまどいのようなものを感じていた。

週が明けて12月7日（火）に松下先生からCD-ROMが届き、資料の内容を検めた。その結果、加納忠男氏が家族に宛てた書簡や新聞の切り抜き、絵葉書など二十数点から成ることが判明した。CD-ROM内の資料や関係する資料を調べた結果、現所蔵者の野田澤子氏の母が忠男氏の妹に当たること、加納氏の祖先は鳥取藩士であること等が判ってきた。資料群の中にある、加納忠男氏戦死を伝える明治37年3月末の鳥取新報切り抜きに拠ると、忠男氏は本次郎（鳥取県立博物館に残る

加納家の家譜によれば6代日本次郎（明治三年家督相続）の長男で、明治12年生まれ。旧制鳥取中学（第十期生。明治31年3月卒業）卒業後、陸士へ進学し、明治37年3月28日、朝鮮半島北部の定州で死した。日露戦争後、定州には加納中尉を記念して忠魂碑や記念碑が建立され、加納公園と名付けられた。附近には加納丘国民学校もあったようであるが始めて知る事ばかりであった。

館内協議の結果、寄贈の申し出を受けることとし、併せて、直接野田家に赴き、より詳細な話を聞かせていただくことで野田家から了解をいただいた。ところで、当初は加納家だけが鳥取と関係するものと思われていたが、その後の野田家との電話のやりとりで野田家も鳥取藩士であることがわかった。

年が明けて1月21日（金）に神戸へ赴いた。寄贈資料は、神戸大学文学部内に事務所を置く史料ネットが保管していたので、まず神大に赴いた。史料ネットの松下先生に対応していただき、資料の現物を確認し、資料がレスキューされた経緯を聞く。阪神大震災後、野田家からレスキュー依頼があったのは元来錦絵資料であり、加納忠男氏資料については昨年末に野田家から依頼があったとのことであった。

その後、午後1時半に松下先生と共に野田家を訪問する。応対していただいた野田澤子氏は7人姉弟の6番目、同席して下さった姉の文枝氏は5番目である。まず、加納忠男氏資料の当館への寄贈についてのお礼と、当館への寄贈申込書への記入をお願いする。あわせて鳥取県立博物館に原本が所蔵される『加納本次郎家譜』、『野田文也家譜』のコピーをお渡しした。その間、家譜や寄贈資料から私が理解できた範囲の話をした上で、加納氏についての話聞く。忠男氏は日露戦争に従

軍し、26歳で戦死した。忠男氏の妹で滯子、文枝両氏の母親にあたるつね（津禰、常）子氏は、明治23年生まれ。明治39年に鳥取高等女学校本科を、翌40年には同補習科を卒業している。同じく鳥取藩士の息子である野田拓郎氏と結婚し、昭和56年に亡くなった。加納忠男氏資料が今日まで残った大きな要因は何と言っても妹のつね子が大切に保管してきたことに拠る。滯子、文枝両氏の話に加えて翌日、両氏の姉に当たる川崎市在住の前田雅枝氏（7人姉弟の4番目で、野田家資料の現所有者）との電話での聞き取りを総合すると、秩禄処分後、江戸から帰った最後の加納家当主本次郎氏は、鳥取市東町に機織工場を始め、最盛時には200人ほどの女工を雇っていたとのことであった。

ところで、野田家を訪問した所、川崎の住む雅枝氏所有の野田家資料も準備しておられ、価値のあるものならば、是非当館に寄贈したいとのことだったので内容を確認する（川崎の雅枝氏には野田家姉妹から事前に清水と松下先生が野田家宅を訪問した際、資料の内容を確認することで了解済みとのこと）。新たに見せていただいた野田家資料は大きく二つからなると思われた。

一群は、明治3年～鳥取・島根県時代の家督相続に関する資料。もう一群は、野田滯子、文枝両氏の父野田拓郎氏が、明治30年代後半、広島高師在学時に書いた故郷鳥取についてのノートや日誌などからなる。拓郎氏は、鳥取中学卒業（第十五期生。明治36年3月卒業）後、広島高師を出て、長野県飯田、広島県福山、三次で教員を歴任し、兵庫の甲南高等女学校在職中、49歳で没している。飯田から福山への移動や甲南高等女学校への移動には拓郎氏の広島高師の1年先輩で後に甲南高等女学校校長を勤める表甚六氏の引きがあったようである。なお、今回当館が寄贈を受けた加納忠男氏関係資料のうち、大正4年にスケッチされた朝

鮮定州の忠男氏の忠魂碑は、この表甚六氏の手になることが判明した。聞き取り調査の強みを感じる一場面であった。

滯子、文枝両氏に父拓郎氏から何か鳥取について話を聞かなかったかと尋ねたが、拓郎氏が亡くなった際、お二人ともまだ幼くよく覚えていないとのことであった。ちなみに翌日川崎の雅枝氏にも同様の質問をしたが、やはり幼い頃に亡くなっているので余り覚えていないとのことであった。

野田家資料を一通り確認した後、貴重な資料なので当館への寄贈希望があるなら引き取る旨返答した際、即座に文枝氏が川崎の雅枝氏に電話をかけてくださったが、不在だった。このため、当日夜に改めて連絡していただくことをお願いし、翌日清水からも連絡をすること、取りあえず野田家資料については魚崎の野田氏宅に置き、後日、雅枝氏との間で話を済ませ、寄贈申込書のやり取りを終えた上で、清水が再び引取りに来ることで同意してもらった。野田家資料には家督相続者や拓郎氏以外の人物の資料が含まれている。私も滯子、文枝両氏から説明を受けるが、加納、野田両家の家族構成などを十分理解していないため、各資料をより理解するために各資料が誰の手になるのか、またその人物がどのような系列に連なる人物なのかを記して欲しい旨、両氏にお願いしておく。この他、阪神大震災の後、野田家から史料ネットにレスキュー依頼があった資料（錦絵）についても当館に寄贈したいとのことだったので、次回野田家に伺った際、内容を確認した上で判断したい旨、野田氏及び同席の松下先生に伝えた。

この他、当時当館で開催していた企画展「鳥取県の国民学校」の案内を持参し、神戸から学童疎開した方たちが観覧に来館した話などをすると、文枝氏は本山第二小学校の教諭で、佐治村（現鳥取市佐治町）に学童疎開の付き添い教員として現地にてお世話になっ

たとのことであった。また澤子氏は母親（つね子氏）や姉弟たちと郡家町（現八頭町）に疎開していたことも判った。

神戸から帰った翌日、川崎の前田雅枝氏に電話連絡する。前日晚に神戸のお二人から電話があったとのこと、価値のあるものなら是非寄贈したいとのことであった。またこの結果を神戸の澤子氏に伝え、近い内に神戸に資料を引取りに訪れる旨を伝えた。

今年の鳥取は、2月、3月は例年になく積雪が多く、また、年度明けの慌ただしさに任せてなかなか神戸で赴く機会を見いだせなかったが、平成17年6月9日に東京、神奈川で資料調査を行った帰路に神戸に立ち寄り、野田家資料を引き取ることにした。午後2時にJR住吉駅にて松下先生、木村先生と落ち合い野田家を訪問した。二度目の訪問でもあり、初回に比べリラックスした気持ちで訪問できたことも事実である。野田家資料については、前回訪問した際に、各資料の由来などの記入を依頼していたが、澤子、文枝両氏が判る範囲で各資料の背景などを記してくれていた。この他、史料ネットと野田家を結びつけた錦絵も野田家に用意されていたので内容を確認した。その結果、大半が明治30年代後半、東京で作成されたものであった。ただし、加納忠男氏を中心に描いた定州城占領之図（この戦闘の際、忠男氏は戦死）が含まれ、錦絵全体で10数枚なので全て寄贈を受けることとした。これら錦絵については、澤子、文枝氏からの聞き取りの結果、両氏の母方の祖母加納トキの母松本ひさが内職として押し絵をしていたこと、錦絵の一枚に東京の加納忠男氏から鳥取市東町の加納本治郎宛てに送ったことが記してあることなどから、加納忠男氏が祖母の松本ひさに押し絵の参考のため贈ったものと思われる。

神戸から帰った後、即座に寄贈資料の目録化及び中性紙での保存作業に取

りかかり、6月12日にこれら作業を終了した。

ところで7月21日の午後、野田澤子氏から電話連絡をいただいた。澤子氏姉妹の母つね子氏が保管していた野田拓郎氏に関する資料が新たに川崎の雅枝氏宅から出てきたが、価値のあるものなら前回同様当館に寄付したいとのことであった。数はそれほど多くないとのことだったので当館まで郵送していただき、内容を確認した上で回答する旨を伝えた。

資料は7月26日に当館に届いた。内容は広島高等師範学校在学中の拓郎氏が日露戦争従軍中の兄文男氏からうけた手紙類や野田家が神戸に居を構える大きな要因となった表甚六氏（広島高師の先輩にあたり、長く甲南高等女学校長を勤めた）が当時すでに高等女学校の教諭となっていた拓郎氏にあてた手紙などからなることが判明した。これら資料は、①創立間もない広島高等師範学校の様子を知ることができる、②鳥取県には日露戦争当時の公文書や新聞が断片的にしか残存しないため、ある程度の制限はかかるとは言え、出征先の状況を知ることができる、③当時の高等女学校で教員の立場にあった人物の考えなどを知ることができるなどの点で極めて貴重である。

この他、野田家の写真数点も含まれていたが、これまでに寄贈をいただいた資料を手にした際、つね子を始めとする野田家の人達をイメージするのに大いに役立ちそうである。

前回同様、それぞれの資料がどの人物の手になるのか、背景がどのようなものであるのかをそれぞれの資料に付していただいております、当方の確認作業の簡素化に大変役立った。

検討の結果、これら資料も全て寄贈いただくことを野田家に伝え、了承をいただいた。

以上のような経過を経て、加納忠男氏及び野田家資料は全て当館が寄贈していただくこととなった。

今回寄贈資料の整理作業の際、比較的短時間に資料群の背景が理解できたが、これはひとえに野田家の御協力が可能となった2回にわたる聞き取り調査の結果及び電話を通してであるが川崎の前田雅枝氏の協力のおかげである。

この他、今回、野田家で聞き取りや寄贈資料の整理を行っていく中でふと思ったことがある。士族の子弟である加納忠男氏も野田拓郎氏も当時の鳥取県下で最高学府であった鳥取中学を卒業し、その後、進学の関係で県外へ出ている。当時の鳥取中学在学生の何パーセントが士族の子弟だったのか調査したことはないが、卒業生のかなりの数がその後、進学の関係で県外へ出て行ったものと思われる。鳥取県からは明治維新以降、その初期には士族を中心として北海道や福島県などへ多くの移住者を送り出している。これについては、当館でも調査研究を行っている。一番最初に今回の寄贈の話を受けた際、私が感じた鳥取と神戸を結ぶ糸に対する奇妙な違和感は、野田家からの聞き取りや資料整理に伴う調査を経ていく内にもう一つの大きな移住の流れという形で納得に変わりつつある。現在も総合大学を持たない鳥取県からは進路の都合上多くの若者が県外へ出ている。明治も平成も基本的な流れは同じなのであろうか。整理の途上ふと筆を止めつつそんなことを思った。

#### 史料ネット活動について

野田清子

一瞬にして家屋全壊という阪神大震災に遭遇し、日々の暮らしのたて直しに懸命であったとき、東灘区役所まちづくり推進課の広報誌で、被災した資料の情報提供の呼びかけがありました。

これは“永く保管された古い資料の処置に困っておられる家庭はありませんか”ということで、神大文学部内の歴史資料保全情報ネットワークがこれ等資料の保全・救出・整理・処分・保管などの相談を受けて下さることを知りました。

早速ご相談させていただき、スタッフの方々がいらして下さって、一つ一つをていねいに見て、お預かりいただきました。その後、調査の上、保管場所の連絡をとって下さいました。

- ① 大正10年前後、父が教材用として一枚の表にまとめていた中国古銭（実物）は尼崎信用金庫の尼信博物館に、松下正和先生がご同行くださいました。（16年12月）
- ② 日露戦争で戦死の加納中尉（母の兄）の当時の新聞切抜、家族あての書簡、朝鮮定州の加納中尉公園の絵はがきなど（17年1月）
- ③ 家系図、履歴関係、旧功書、錦絵など（17年6月）

②と③は鳥取市鳥取県立公文書館に保管していただきました。

両親が遺していました明治から大正にかけての資料が一族のものとして終わることなく故郷の鳥取市に保管していただきましたことは、全く松下先生はじめスタッフの方々のご尽力のおかげです。震災のあとから今日までご多忙の中、ていねいに取り扱って下さいましたことを心から感謝し御礼申し上げます。

鳥取から度々いらして下さいました公文書館の清水太郎先生からはことしが日露戦争から百年記念の年で、展示資料にしていただけることをおききました。また家系もくわしく原本から調査のお手数をおかけしました。感謝に重ねて御礼申し上げます。

# 源平合戦

～伝承された戦いの虚実～

今年の「義経」ブームで中世の合戦が脚光を浴びていますが、伝承や物語のロマンが先行している観は否めません。神戸市を舞台とした合戦を素材に、近年の中世の戦争、武士像、内乱などの研究成果を皆様に提供し、史実や地域遺産に対する関心を高めていただきたいと思います。

日時 9月25日(日) 13:00～16:00 (開場 12:30 から)

場所 神戸市水道局たちばな研修センター多目的ホール (定員 400名)  
神戸市中央区橋通3-4-2 \*湊川神社の西  
(JR神戸駅あるいは高速神戸駅より北5分)

主催 歴史資料ネットワーク、兵庫区民まちづくり会議、兵庫区役所  
内容

スライド「神戸源平史跡・今昔物語」

山本陽一郎氏 (神戸大学院生・史料ネット) ほか

## 基調講演

「源平合戦の虚像を剥ぐー生田森・一の谷合戦を中心にー」

川合康氏 (東京都立大学)

パネルディスカッション「内乱史研究の最前線ー武士、伝承、地域社会ー」

パネラー：川合康氏、高橋昌明氏 (神戸大学)

源健一郎氏 (四天王寺国際仏教大学)

コーディネーター：市沢哲氏 (神戸大学)、藤田明良氏 (天理大学)

参加費 無料

定員 史料ネット枠 50名 (兵庫区役所募集枠は締め切りました)

申込方法 ハガキ・FAX・メール・電話のいずれかで

住所・氏名・電話番号を明記の上、下記史料ネットまでお申し込み下さい。

締切：定員になりしだい

史料ネット NEWS LETTER No. 42 2005年9月7日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後1時～5時)

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/> e-mail:[s-net@lit.kobe-u.ac.jp](mailto:s-net@lit.kobe-u.ac.jp)